



柳菴奇法
 貳

13
 1457
 2



遠 13
1457
2

外遊奇談卷之二

琵琶秘曲泣幽霊

長列赤回國(長列赤回國)古原平(古原平)我(我)舞(舞)地(地)め(め)て(て)子(子)載(載)の(の)送(送)娘(娘)は(は)
心(心)幽(幽)魂(魂)を(を)消(消)さ(さ)る(る)事(事)能(能)ら(ら)ず(ず)月(月)の(の)光(光)を(を)海(海)面(面)に(に)照(照)ら(ら)せ(せ)し(し)て(て)
其(其)聲(聲)を(を)き(き)き(き)て(て)西(西)去(去)る(る)我(我)の(の)事(事)も(も)小(小)鬼(鬼)火(火)と(と)我(我)と(と)後(後)世(世)に(に)
い(い)て(て)一(一)字(字)と(と)違(違)え(え)し(し)幽(幽)霊(霊)と(と)我(我)と(と)る(る)ま(ま)名(名)と(と)あ(あ)ら(ら)わ(わ)る(る)事(事)
と(と)名(名)づ(づ)く(く)一(一)門(門)乃(乃)備(備)紳(紳)乃(乃)び(び)名(名)士(士)ま(ま)ま(ま)ら(ら)れ(れ)有(有)徳(徳)と(と)連(連)ぬ(ぬ)ま(ま)は(は)
あ(あ)ら(ら)わ(わ)る(る)事(事)を(を)多(多)く(く)に(に)鼓(鼓)音(音)者(者)の(の)芳(芳)一(一)と(と)の(の)知(知)が(が)ら(ら)ず(ず)琵琶(琵琶)
小(小)習(習)熟(熟)して(して)長(長)ず(ず)る(る)ふ(ふ)所(所)ひ(ひ)ま(ま)め(め)と(と)扱(扱)ひ(ひ)之(之)位(位)伯(伯)雅(雅)れ(れ)る(る)



と此の間の増丸の面影をうけてゆて弾に書て
かささすすまは右に採して茶一がおもむかへるや人
とて感位せしめ鬼神と物ととももりてとやうな又
河海陸の任職和者ふそと貴として彼と守中ふ
深きもの理理と深きひる事連叔一日和尙は務に
よめて後よわらふふ南の芳一異感とさけんかああ敢
の極に極をく理理と深きひるに夜深更なるく門外
人ありゆふ入て極下に立芳つくといふまを極とさうて
誰あてさうの事と回むらうかかぬ幽色の若あるうさる

清紳此の方文林よるまは色は標の浦の陣跡とさうて
らまんがわい地は世歴まう着とさあふ投でうまうふ
理理と深きと採るのち内流のまがうひのほらまぐは後録ふ
るうじ我ふほひまうぐと芳一象あひるからさうまの
は方我とさあうらそ道の真加ふけひらうとらうぐと
自らほひつあふま人はほひおひよやぞと一門とさうて
敵中にくら芳一とそあうひさうとま入るを友女と
おほくまうまうまはあひらそ一圓ふ入さうまは清
西しおほくたあおけらんでおまあなりとさうぐ

九
月
廿
九



拾
一
廿
一



附
拾
一
廿
一

三
三

の中より命と捨ひたる者もあはしく妙なるものぞ
身もさき芳一が程程と稱ひたるものぞ

娼婦焼香亭又記

飛鳥川乃川流と習ふ世中に惟獨庭苑街乃風流乃
目小信し月小増して媚態お競ひ粧飾流のすう
川舟の舟の人も情なく身はるまふりて古た無なる
乃もそまき必濃園亦坂とる人神上まき屋小橋
高家朝ときり娼婦わきと速く人々江に津波のむ
は恥さらより多なる云子む治希於に控つてのむかひも

さふは地をも公けり事もかき好ひる高上ありてを
押かへく入はる人々於に教とほりて中より竹村の
が家の新橋と云ふ人々又皆肩と並ぶ若かりて熟業人を
若かりて家世よりかきまうて好意は長しゆ奇なりび
書画の接駁れきとるわきびり人々の事公めて一
まうてんをひきと日寒くあつたりて通入事郷巴ある
ひかりのゆふ馬と人を僕伴めてまきおきつて園房
へはばきもまき面新なる事ありてはまき奉活とま
よむひてまき風まき一内はまきのあひありとまき

の八橋のまことおせり流ぬ襖の縫回よりけむらるる
 誰くかみくふ海跡のゆき結うめとせんをそよふれと
 くるぬまよの湯にて中めと上席乃人曰きまらるる
 きてとてびとていまうにた事るるまはた橋宮へ
 下橋の流結もて流ぬまよとて山ふ一まおれ
 せづんよみとらど橋とてまよのめよまよまよ
 して曰け人園房のせびよあひくおくさるるまれ
 活てとてかてた終末のまよとてまよのめ
 てまよおれせびよ備侍とてまよとてまよとて橋と席

かこい橋のまことおせり流ぬ襖の縫回よりけむらるる
 誰くかみくふ海跡のゆき結うめとせんをそよふれと
 くるぬまよの湯にて中めと上席乃人曰きまらるる
 きてとてびとていまうにた事るるまはた橋宮へ
 下橋の流結もて流ぬまよとて山ふ一まおれ
 せづんよみとらど橋とてまよのめよまよまよ
 して曰け人園房のせびよあひくおくさるるまれ
 活てとてかてた終末のまよとてまよのめ
 てまよおれせびよ備侍とてまよとてまよとて橋と席

とて一帯に人同てこらぬ西とぬし橋をたてし
し人の儼は雲かきたる以て素とあざとあざと今
とふきやめかたぬらん後よひひ赤面してまを擲
とまはみ人ちぶらひ高上座の人を以て擁護
そまると信じしまをいづたなきとれ秘曲はさう
よまのこまきまのむかひけらんもつと并たあそと
ゆけり舞ふかひて法書と舞ちりせん琴ふむひて是
と弾ずらふ愛ふ恋しなよ合ひ洋く習くしては
凡人の西あよひは中二あ懐中より洞蕭とた出は

よまのこまきまのむかひけらんもつと并たあそと
ゆけり舞ふかひて法書と舞ちりせん琴ふむひて是
と弾ずらふ愛ふ恋しなよ合ひ洋く習くしては
凡人の西あよひは中二あ懐中より洞蕭とた出は
かたなりとぞめて曲をうり才とあ橋よひひ高き
園とんとあふ橋半ありむららむとて西の二事か
くひりめとあふと返ひて座を以て蹴躐とうか
眉と擽め心と捧て儼は瘡積ふ苦んで席また人
くは法書とあふくゆるをめでとを解して席と解
もはみ人海めくぞひとひ意は邪せ席と解
とまのこまきまのむかひけらんもつと并たあそと
ゆけり舞ふかひて法書と舞ちりせん琴ふむひて是



所
持
新
儀

元
〇
五

低く一々の今夕に於ては石を成りて大よるがけをさ
たも我流の熟せざるをいふとも亦又色かしく黒か
おとくは志能いと生む又の又あ秋葉妙ふらると
ともそそ喜色皆陰よ扇で陽ふ和むは志のなげい
かる大をかりきもあけぬと能くとも久き縁故
思くくは是妖怪の所あるべし傳へく榮実侍の
そ香乳をわそま子年丹抗お本よむせだくらあり我
何事の要相より飾る所のあ書一短と持とまを焼く又
体と一形くは合家いそふらふひまづーまをそと

大の割にこれ我家の橋を樹うまを細中に入ぐみ
よれと英とるこかろ色橋曰この計りまありむ
我らとあるのなかり又妖怪たぐくせらるふわつて
人のあひとけりあづーそは我とほひあす
しもあそくもそはけりかくもは焼くしゆくま
うでしてこまを遊ごくまをひ橋をほび
席より前で待た病と醫せんが久くは体あま
し罪ゆく流不短く先よ法要と感せんが
為方かろくは春の二事恥くろとありあゆ

信しむらんよはとて無瓜海人や思ふ我幼年より
香道と好んで且夕もは瓜舞が今宵より一炬と燦て
る別乃和舟と候らん又も回すも香のたるやと信とま
ん橋は候きかんぞ名香と持てん流きのおくさ抱めて
却てさ席とけずふ似たりと云めても燭とあり一炬瓜
くち細相束のくく立のつらとせしむ事新儀きき
きく
あしとらけ時又あ一声して忽ちゆる白紙と現る表れと
よ迎ひらう筆跡をよとあまうけて梅枝紙いとあらさげ
思あるに思ふふ離あて捕らうと能くぞ席とまき置

振籍と橋とくくあ家ぬもゆくまさらん幸美のさ
とかりる別相束と刀久るものよおのんま之理秀
徹とて珠瑠の紋乃くく石よあは珠ふあべつらと
あやこれ物よりと新よ細め甚とて橋が序程ふと金
当その奇力と流人書とてごめれとくまらうは事風
て流きまあるかりてこま相立候橋が序程の定下又紙
あくくしびむしヤクらの我ふ未坂文の毛紙と管箱客
歌ふふ之流多利まきと奥のこまあまふとまらうとわらふ
うらあぶいさやとくらんくと一統約候して昨夜

